

### こんなに大きいおも

10月25日(土)、立山町民農園で鳥原子環境クラブの皆さんが、いもほりを行いました。これは、5月に同クラブの皆さんが、さつまいもの苗を植え、大切に育ててきたものです。午前9時から始まった作業では、生憎の小雨にも関わらず、「こんなに大きい」、「こっちにもあるよ」と歓声を上げながら2キロ以上もあるさつまいもを一生懸命に掘り上げて、実るといふことの素晴らしさを実感していました。



### 全てお母さん達の 手づくりです

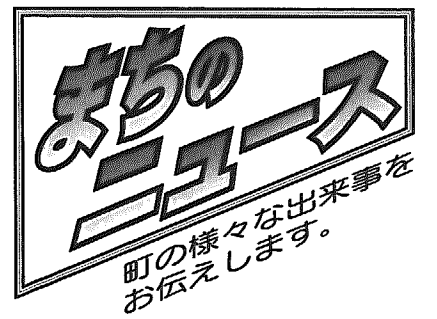
10月29日(休)、総合体育館で乳幼児を持つお母さん達の交流会が行われました。これは、子育て支援の一つとして、各地区にある「子を持つ親の集い」という10の育児サークルが、年に一度交流を図り、情報交換や親睦を深めることを目的としています。当日は、母親達の「名刺交換ゲーム」、そして、各サークル独自の遊びの店を開き、参加者が楽しめるようにとシールラリー形式で様々な遊びが用意され、手づくりのおやつや輪投げ、新聞紙でつくったプール、魚つりなど、やさしい気持ちで沢山感じられるものばかりでした。高価な既製のおもちゃがあふれる今、身近にある材料でつくられた遊びに子供たちは、手づくりのあたたかさを感じていました。

### 熟練された技に 釘付け

10月18日(土)と19日(日)の2日間、新潟ふるさと村で新潟伝統工芸まつりが行われました。これは、新潟地域広域市町村協議会を構成する18市町村の伝統工芸品を一堂に集め、展示、販売・製造実演を行うことにより、同圏域を広くアピールし、伝統文化の再発見と伝統工芸品に関わる地場産業の振興を目的に開催されたものです。18日午前9時から実行委員長の新潟市長らのテープカットで始まり、パザール館やアピール館では展示、実演・販売が行われ、イベント広場では太鼓や舞などの伝統芸能が披露されました。安田町の庵地焼や巻町の桐下駄などの熟練された技の実演に訪れたお客さんは釘付けになっていました。



伝統工芸品まつり



### 園児と町民農園 入園者の楽しい昼食

10月23日(休)、新潟ふるさと村裏の河川敷公園でいも煮会が行われました。これは、金巻・立山町民農園の入園者の皆さんが、町内保育園に無農薬有機栽培の里芋やさつまいもなどを使って、野外調理の楽しさを味わってもらおうと催されたものです。当日は天候にも恵まれ、昼食会では美味しいいも煮汁のお代わりをしたり、いも煮汁のお礼に年長園児約200人が愛らしい踊りを披露したり入園者との楽しい交流を行いました。



これによって、昔から「運転手はきみだ、車掌はぼくだ。あとの四人は電車のおきやく。おのりはお早く、動きます。チーン、チーン」と歌われた電車の車掌が、合理化のためになくなったのである。ワンマン電車が知らない今の人たちは、この電車の童謡も知らないと思いが、小さいころからこの歌を聞き、歌いながら育った筆者らにとっては、車掌の居ない電車はなんとなく、もの寂しいものである。昭和五十七年七月一日、貨物取扱廃止。昭和五十八年四月一日、自動列車制御装置(ATC)使用開始。翌五十九年三月三十一日、列車集中制御装置(LTC)使用開始。前記のATS、LTLについて技術的なことは、素人の筆者には分からないが、これは電鉄全線の電車を東関屋駅において集中管理し、走行中の電車の位置の確認から、すべての安全体制がこの機械によってなされるという。そして、何時のころからか分からないが、旧県庁前駅をはじめ、当町の焼酎駅や、越後大野駅、木場駅等からかつては、駅長以下十人近くも居た駅員が一人も居なくなり、最近では、二人のパートの人たちが駅務をこなしているようだ。ATS、LTL等の機械導入によって、はじめてこの駅長以下駅員全員をなくするという大合理化

がなされたものと思われる。昭和六十年六月一日、新潟県庁の移転により県庁前駅を白山前駅と改称。平成四年三月二十日、白山前駅-東関屋駅間、二・六キロが廃止された。これによって、東関屋から旧県庁前まで、白山浦の商店街を走っていた路面電車の姿が見られなくなった。開通当時は新潟の人たち、特に白山浦商店街の人たちから、電車の白山浦大通りへの乗り入れは、街や市の発展につながるものと、大きな期待と喜びのうちに迎えられたものだった。この東関屋-白山前駅間電車線廃止とともに新潟交通では、平成四年四月一日から、東関屋駅-レールアンドバスシステムによる輸送を開始した。これは、月湯から沿線の電車の乗客を東関屋駅から市内へバス輸送するシステムである。平成五年八月一日、月湯駅-燕駅間、十一・九キロ廃止。これにより新潟交通営業路線は、東関屋駅-月湯駅間、二十一・六キロとなった。近年、自家用自動車の普及により、電車利用者が激減し、あらゆる合理化の手を打って事業の継続に努めてきた新潟交通であったが、平成九年四月十八日の新潟日報に「企業として限界。東関屋-月湯間本年度末廃止へ、利用者減り累積赤字五十四億円」という記事を載せた。(続く)



新停留所の増設で利用者増加を

(先月号からの続き)昭和五十五年四月、ワンマンカーにする前段階の電車を自動扉にする計画がたてられ、新潟鉄工所でその改造をすることになった。八月二十五日に新潟鉄工所の人が検分に来て電車を新潟鉄工所へ運ぶことになったが、同じ新潟市の新潟鉄工所と関屋の電車工場は、距離にして僅か数キロしかないのに、電車の輸送が大変だった。燕駅まで自走で、それから国鉄の機関車で牽引して新潟鉄工所へ送られた。営業をしながらこの改造が行われたため、電鉄の全車両を改造するのに一年余の月日が費やされた。昭和五十五年十二月十八日、電車に無線機の取り付け工事が始まる。同年十二月二十八日、西浦七穂駅が放火により焼失。昭和五十六年二月二十三日、七穂駅新築。新駅舎で営業を開始。昭和五十七年一月一日、黒埼中学前駅が営業を開始。同年二月十五日の広報くろさき二〇二号に、一月一日開設された黒埼中学前駅の記事が次のように載っている。「一月一日(金)から『黒埼中学前駅』が営業を開始し、中学生を中心に利用者も多くなりました。また十二月定例会議で西善久駅設置の請願が採択されました。その一方で、利用者の減少や騒音などの問題があるようです。しかし、朝の各駅の様子を見ればわかるように、本町の交通機関の一つとして電車はなくてはならないものです」と。同特集記事の中で岡田幸平さんは、「現在、経営状態は依然として悪化の状態であるが、黒埼中学前や東青山の停留所増設によって、利用者が増え、再び廃止の声が起らないように折りたい」と述べている。そこには、苦しい新潟電鉄の経営状態が、この二つの停留所の増設によって少しでも好転しているという願いがこめられている。昭和五十七年四月一日、ワンマン列車の運行がはじまる。